

## 〈書評〉

チャールズ・ラム著 南條竹則訳 藤卷明注訳  
『完訳エリア随筆Ⅳ 続篇』下巻  
(国書刊行会、2017年)

---

熊谷めぐみ

---

本書は、南條竹則訳、藤卷明注訳によるチャールズ・ラムの随筆集『エリア随筆』の新完訳版全四冊の最終巻にあたる『続篇』の下巻である。『正篇』上下巻、『続篇』上巻に続く本書も、これまでの三作と同じように労作と呼ぶにふさわしい。また、今作でも注釈は詳細を極め、膨大かつ多種多様な引用、当時の習慣風俗や地名・人名などの固有名詞の中で埋もれてしまいそうな読者を確実に導く。また、執筆時の状況や交友関係、初出の雑誌版と年月を経て刊行された書籍版との違いなども詳述されており、時に難解なエリアの世界を知ろうともがく私たちを明るく照らし勇気づけてくれる。

ロンドン生まれのチャールズ・ラムは、ロマン派詩人コールリッジを生涯の友とする作家であると同時に、東インド会社で三十三年間勤め上げた一会社員でもあった。「エリア」とは、ラムが作り出した架空の語り手であり、その背景には、同じ職場に勤める兄ジョンに配慮したという事情があるようだ。しかし、エリアという仮の姿を得たラムは、意気揚々と筆を滑らせ、時に読者をからかって煙に巻き、時に脱線したまま本筋に一向に戻らず、頻繁に逆説と皮肉を駆使し、なんとも楽しそうにその仮面を誇示してみせる。それでいながら、人を食ったようなエリアの話しぶりに苦笑していると、突然素顔のラムがそこに姿を現し、ハッと息をのむような率直さを突き付けられることが多々ある。

エリアが仮面であるからこそ、逆説的にむき出しの生身の存在になれるのだ。作品に通底する大らかなユーモアとペーススの間に垣間見られるそうした揺れや不安定さこそが、エリア随筆の魅力を生み出していることは間違いない。

本書には十一編の随筆が収められている。書籍化は必ずしも執筆の時系列順ではないので、収録されている作品がすべて最晩年の作というわけではない。しかし、長年勤めた東インド会社を辞職した翌年の1826年に月刊誌に連載された「巷間謬説集」中の十六の「謬説」など、晩年のものには、それまでも見られたラムの辛辣さがより顕著な形で現れており、読者を困惑させる。また、失われた過去への強い郷愁の念は、『正篇』上巻に収録されエリアの実質的デビュー作である「南洋商会」から一貫する重要なモチーフであるのだが、本書では、これがさらに進展し、老いとの関連に及ぶ作品が散見されるようになる。孤独感が強まり、奇行が目立つようになったというラム自身の晩年の心境が投影されているのかもしれない。それでも、エリア独特のユーモアは失われていない。また、「サー・フィリップ・シドニーのソネット」や「現代美術の作品に於ける想像力の欠乏」などの作品には、好きなものに精一杯の情熱を傾け続けるエリアの微笑ましい様子が相変わらず見受けられる。

注釈によれば、ラムから『続篇』を献本されたロマン派詩人ワーズワースが気に入ったという二作が、「婚礼」と「古陶器」である。1825年6月号の『ロンドン雑誌』<sup>マガジン</sup>で発表された「婚礼」は、ラムの友人バーニー提督の娘セアラ（作中ではエミリー）の婚礼を題材にした話で、まずは一人娘を嫁がせる父親の苦悩や、婚礼でのエリアの道化的な役割が軽妙に描かれる。その上で、後日バーニー宅へ訪れた時の出来事が語られることになる。そこは、以前と同じくつろいだ雰囲気のある旧友の家である。しかし、「懐かしいこの家はどこか調子が外れている」(89)のであり、「我々はみな年若い者のいないことを寂しく思う」(90)。そして、「この家の若さは逃げ去った。エミリーは結婚したのだ」(90)と結ばれ、どたばた劇から一転して、嫁いだ娘の若さと対比されて、残された夫婦の、あるいは後に養女を嫁がせるラム自身の老年の切なさが不意に浮かび上がり、余韻を残す作品となっている。また、1823年3月に『ロンドン雑誌』<sup>マガジン</sup>で発表された「古陶器」は、エリアの従姉妹ブリジェットに焦点を当てたものである。ブリジェットとは、1796年9月に精神を病み、母親を刺殺するという痛ましい事件を起こした、年の離れた姉メアリのことで、この事件の後、ラムは生涯にわたってこの姉の面倒をみることを決意し、同じ家に住み、互いに独身のまま、共同で執筆活動を続けるなど、寄り添って生きてきた存在であった。ブリ

ジェットに注ぐエリアの視線は終始あたたかく、二人の絆の強さを感じられる作品でもある。プロジェクトの直接話法による語りが続くこの作品では、プロジェクトが、裕福になった現在よりも、貧しいけれど何もかもが新鮮で大切に輝いていた、「楽しかった昔が戻って来れば良い」(103)と思い、過去と現在の落差をエリアにとつとつと訴える。するとエリアは穏やかに、「あの抵抗力一境遇も狭めることの出来ない、若い元気のあの自然の張り——は、とうの昔に僕達から消え去ってしまいました」(110)と言ひ、実に悲しい補いではあるけれど、「老人にとって、財産は若さの補い」(110)であるとして、若い頃にできた無茶は、今では出来なくなったのだと応える。二度と手にすることの出来ない失われた過去に自分の老いを重ねて、あたたかさとともに人生の悲哀を感じさせるこの終わり方は、互いに寄せる二人の愛情と相まって、読者の心に深く染み入る結びとなっている。

エリアの視線は過去へと絶えず向けられているが、それは若さへの羨望ではなく、失われゆくものに対する強烈なノスタルジーに、そして、置いて行かれるものに対する深い共感に向かう類いのものである。「古陶器」においても、若さを取り戻せたら、と口にするエリアであるが、そこには失われた若さへの執着などはなく、むしろ老いを穏やかに受け入れつつあるようにも見える。過去に向けられたエリアの、恨むことなどないこの純粋な憧憬の視線こそが、ノスタルジックなエリアの語り、その幻想を共有する読者が心地よさを覚える秘密であろう。

注釈でも何度も指摘されるように、エリアの仮面は非常に不安定で、真剣に騙す気などない。苦勞せずともエリアの仮面の向こうに、何度でもラムの姿を見出すことが出来る。それにもかかわらず、『完訳エリア随筆』全四冊を読み終えると、ただの、それもかりそめの仮面であるはずのエリアと別れるのが辛くなって来る。しかし、本シリーズのページを開けばそこにはいつでもエリアの姿を認めることができる。エリアがよくしていたように、私たちも大いなるノスタルジーを抱えながら、過去の幻想への旅をエリアとともに楽しむことができる。現代日本の読者に、最適な方法でその楽しみを提供してくれるのが、約80年ぶりの完訳として、詳細な注釈を付し出版された本シリーズであることに疑いはない。